

古今和歌集正義

序正文  
總論

一

7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5 6

香川景樹大人著述

# 古今和歌集正義

序正文 總論 東鳩塾藏

古今和歌集序正文



ひよのとよ改む

やまとうへばじとくろをひよへ  
ようひめたとせふとをなまきりる。よの  
中はあく入。とつを志ルキモのされハ。んは  
思ふ事。やるをかくへねはりくへひ  
しきるなり。れはなく寫。れはすむしも  
かくゑをれせば。おとへづるゆひ。つまう  
うひとよまやるをくら。ちやうをもひきすと  
あめつちをうおう。めみえぬかよ秋も  
竹たれとおゆき。とこせの中をもやう  
あ。きなむかのぬるふも。たゞをむる

うこなり。おれう。あせはちれひ。うけも  
まをけひさきよりうくさふらり。あうへあ  
きとせよほひたるおとせ。ひそかの内に  
めうして。おきてひめよけする。あうの  
詠うつわかへく。まをせよみとよりと  
詠うとく。ちもやあく詠代はす。せー  
もやうさまへ。まをせよととのんじき  
やこうをきく。えあせとがりくう。みそを  
一あまりひとせ。よみくら。かくてそだ  
とめくをとく。轟とくわいひ。轟とくわいひはゆ

く。あんとせかねくとまくよなうよま  
る。そやき取もつぐるあきとよくま  
すりく年月をとく。たうきふかわと  
あちかむちゆうなきく。ほまふせと  
ひくまでおひれやまとくとく。あれう  
うのちんとせんなり。なまの内にすいみ  
ちかくせよくなり。なまの内にすいみ  
このうれしこれ父母のやうふくそ。でなう  
ふ入れた。がふもあら。がふもくおろきま

ひよみだとくちの下がやせ  
まのみうらとそへとすあまうす  
難波つよはやめだをすり今ハ  
ちうてきくやこれれどるなる  
下被うよへきへきはトさ  
花よかくひづくさたありあみさ  
ゆよざつまひへもあくまそと  
ひかがりへみけはなすす  
のトえよけはあーこの裏のあ  
まそ<sup>な</sup>い恋しよとしきをや  
アマうんとごろ成へすらよぶこ  
とくうころ下がりの恋ことももも  
つまーあやそ浦うらのとまえまき  
そよみつくともそやるなりた  
つまーあやそ浦うらのとまえまき  
ちられなきせなりたうたう  
まえのとめゑうれれがす  
とこかがりへむりよくま

むりなり。かくは前まへをやくそあくま。その  
せくとみひよみだとくち。ゆくらはだうと  
一す。みけはなすまへす。よけはまとく  
す。じくはなすまとく。むけはまとく  
す。なま。今れよの申のろよつき。入いる花  
えよりふりりよる。あこなるす。ちう亂まこ  
とめこづくを金かなに。是これおのの家ようされま  
わ人ひとをきぬことく。ながりをまかうこころ  
つま。花はなをくき。ねよつこすま事こともあ  
すすなりふくら。せれだだを思おもてかかるく  
す

おれ下あれはむもとみ  
やききるゆのうよのうよ  
あつうをせりとごろ成すらの下が  
首くびれく詞ことと刪さ  
さしおの下がりの二ふたききを補ほ  
あくは花はなあ下がてあの二ふたきき  
補ほ

なんあるぬ。うーあととせみうと。まは花  
の行ゆ。林はやの日ひれれととぶ。やくやく娘むすめ入いる  
やく。おとよせりくくくくととまつまつ  
先さづづ。おとよせりくくくくととまつまつ。だよ  
きなきゆゆままひ。あらに目めを思おもととく。  
あくふふやよたときき心こころをやよままじじて。  
さめめおううなららととうう先さづづん。ああ  
せせよよううも。せせれふふよよききととばばよ  
せせくくををおおうう。よよひひ身みよよききの  
ひなひなよよああり。ふふれ煙えんよよききてて人ひと

ひ。松虫はもとより志のひ。高畠をみえた  
ねも。あひかむのやうなふえ。男山はむく  
とかりじつて。と風へておーとまをうすくも。  
うきをひそそなくさり。又またあこ

林カタタケルト 来ニ及ヒ よもれちをだん林の來ニ本れりのおりるを

か。あるは三一とよ。やみのうけよみゆ。雷  
と浪ととなり。またはゆ水乃河とを  
ヨリみをかとり。かく、さよがやうえをこ  
そく。くわいせとう。なし。せよまいてあく  
せよまくのトテの一言を補ふ

正文 三

耶帝れあをく。林をまろあきをなづめ。  
あつひまがあまれをひづくをう幾へ。あひ  
くをせれうきふく。や木。すれ行をひづ  
く。すのやをうきつづ。今ハキーカ山も  
煙くすなり。あひれをほくらなり。也  
そひく入ハ。うづかにうをなべた先づ。う  
をひろすをふく。かねおんせや。うづ  
あひく。がすのやとの入まろなん。すれ入

かのおんせよのト [おふさざく]  
のくわの一らを刪ア [あひて]  
ウニミを補ふ

しをなしけ。これにあらひとせ。すとおも  
きあらとつぶゆりて。林のゆきと雪の門は  
なづゆく。やみちぎだ。みのとせおやんめふ  
鶴とやくとすひ。すはあしとよのゆれさ  
く。入まろのゆつは。やうのとせおなんが  
ねえりる。又やまへり赤入とつ入あま  
り。うよあやへてたへなむなり。入たれ  
赤入うかふくと。とくとく。赤入ハ人ま  
うつ赤ゆふきとん赤とつたくなんあり  
り。赤入とがまと又すぐまくろ入を。

やまのト内の一をと刪る

正文 四

しをなしけ。これにあらひとせ。すとおも  
きあらとつぶゆりて。林のゆきと雪の門は  
なづゆく。やみちぎだ。みのとせおやんめふ  
鶴とやくとすひ。すはあしとよのゆれさ  
く。入まろのゆつは。やうのとせおなんが  
ねえりる。又やまへり赤入とつ入あま  
り。うよあやへてたへなむなり。入たれ  
赤入うかふくと。とくとく。赤入ハ人ま  
うつ赤ゆふきとん赤とつたくなんあり  
り。赤入とがまと又すぐまくろ入を。

名づくれのト やけの二

と刪る

名づくれのト こくよが  
」のとともすれどもも  
あらへりつゝひとりゆ  
なりまあるときとくらきえ  
たらとくろえぬとくろこうじ  
はなんあるのとまと取て次  
る十つとくとんをつぶなせ  
と置  
年ハとくとせのト よの一をと  
補ふ  
今これまとのと  
まもあらとをあきる人よも人た  
やうじのとくとせのと

主かのト **ちうきせよ** の一  
ウタとだいもす。其が又あらまことえ  
ウタとれどもまとすを。たゞハ高きから  
セミタス。さつらむ心をうこすつぬ。主ふ  
力をひく。それよりあまやとおとは  
さうだ。あめの花の色をくそ。ふくひの  
ふるゆか。やんやれやまくく。おとく  
キくこまくせのとまぬはおちく。たゞ  
あき人比トシテヌ。おこてんらおゆく。

宇治山のト **傳** の一字と刪る

宇治山のト **傳** の一字と刪る  
うなとだいもす。其が又あらまことえ  
ろ人をすれども。僕に遍服ハ。うとれどもハ  
えとれどもまとすを。たゞハ高きから  
セミタス。さつらむ心をうこすつぬ。主ふ  
力をひく。それよりあまやとおとは  
さうだ。あめの花の色をくそ。ふくひの  
ふるゆか。やんやれやまくく。おとく  
キくこまくせのとまぬはおちく。たゞ  
あき人比トシテヌ。おこてんらおゆく。

正文 ュ

ア、小町ハのト **ハサヘ乃衣**  
通端の宿なりの一匁と刪る  
そのころのユ云と補ふ  
あれのト **ならやう** の云と  
刪る  
そのト **す**この三言を補  
ふ  
ア、あちかまく **まつ**のこつよかく。たゞ  
よき女れなめろあるばくら。ほよ  
くらぬは女らうこなとだきく。たはれ  
くらぬ。こう後がうくそれさま  
や。たまたまおへる山入れ。れのつけ  
よやまくうつほと。此外の人々の名

きこゆ。おへよかからりうれちひらこ  
や。おやしよ志りまほの氣のじくよも不  
うきと。うことおも思ひて。それさまあう  
ぬなり。がろよ今すらきみ。あ先の  
じこあうります。よほにせこれうり  
よなんありゆ。あまのむかわんうつぐ  
三れ波。まのまかまくなられ。ひちまお  
やん先くまえ。はくたふの隸より。志  
りくおなづと。あれすいどとをきこ  
一す。ひとまゆろくわこととすく強ハぬ

正文

あまりよ。おへれとすもつすき。おとふ  
よともおこー旅ふとく。今せんそなり。  
渡のせすもほこちまこと。延喜九年四月  
十八日。大内記。きれ友乃。書。清書れとこ  
ら。あつうきあはうゆき。やまのうひ。の  
さう官がふーふちれみけ。たまの府生  
ふあくと。おもつよおトセ。おもと  
あよ。おもつよ。みはうれも。と  
まつ。おも。旅へくなん。をきうやふ。樹  
をかさん。おも。おとく。きすと。ま。

夫をかりひのト **ヒトシ**  
友と改び  
あさるのト **やま**の二三を刪

32 繁き事と雪を下すよつるまで。又晴る  
翁よはりく考と思ひ。友といたし。林ちよ  
友と改め  
あさるのト **やま**の二三を刪  
る  
文子を下そつまをこひ。金坂よつりてこ  
むりと新元。つるハ春夏枯をもすゑぐ  
さくれすなんそうせ珍ひり。すく  
もうごとこまさ。なしきそお今和奇集と  
ふ。うおれいあひのあひ先えうぢれで。ふ  
こねろくとす。漢のあめれうすかやくつ  
ゆをぬきば。まほあすつ河内ぎよなう  
らをもきこす。これ石れいちやくす

正文 七

よろこひのみをあきらかト  
**それ**枕と **こまく**松 **まく**改

うちあひのそらをこま。 **ひと**から松 **まく**改  
たまれ花よわひもくなくして。むすき  
名めこ枯のよれなつまとかことまく。う  
た入れみよがく。がいひすれそろよそ  
ちおきへとだひくせよ。もん。なくあら  
わおきかへと。ばくらゆまくらうたれせよかく  
くくうすれらく。おれ事のよきよあへと  
なんよろこひゆ。人まわなくわらふ。れ  
と。被れ事こそまれる。ことひせつはモ  
キ。事せよ。たうひか山ひゆきふとも。あ

すやあらわれゑいとす。ねれもあちら  
うきんして。まことひがつらなづつる。  
あれあとひきくそくすくら。じゆせさま  
まちあら。とめこうをえくらん人を。お下  
そうせ月を下るつたとく。古をあきさ  
て。今をこひさくらめかき

此序ハ頬取法橋の古今抄をくめ或家に傳ふる  
石の古寫本をも。舊より刊本ともと彼此

正文 八

求め集シト其異同を校カニセへ正ヨキ其善ヨキのを擇セレひ  
宋ソウ々シテ姑クモ正文トド其取捨セレ所コトハ即ち其文  
の頭アヘンよりの一侍シテ也。より其謂シテ其出アヒ至  
りて、本註マニラ其シテ中ミテ其シテ愚業ヨウヤ申  
一試シテふふハ□をかへおき侍シテぬシテハ正ヨキ奉スル  
出アヒと侍シテ據シテあきれシテ侍シテゆめシテか  
やシテ發スル也

古今和歌集正義總論

景樹竊よ考る小。大同弘仁の大御世より。詩學やうく  
盛さかん小こーて。寛平延喜のかんん時とき。及ひくそ。殊よ甚  
一いくハ侍し。朝となく野のれく。詩こうあきと尚  
ひそく。大和歌お言ご痛いたうぬをも。笑わーよ戯戯。卑しめ  
て。正ま實じならんあくかふくも。是を咏うふも面おを伏ふえ  
至き。歌かかくろゑ。事ことも。是よも甚いーよも非さ  
非さ。紀き氏う。古い方が衰せ弊ひ。憂うい給はい。也よよう。詩し歌か  
也よ。其そ音お清き濁だくか。其そ義ぎ幽ゆ顯けん。そういある事こと。

そつ小辨トク。又ハ小一卷。今北大和歌ヒタチガシ。それ  
うちよと勝トシをトシを撰ツケひく。千首サタタキ。古今和  
歌集ウタハタ。号タケをタケ。奉タマ給タマ。いタマ。大和歌ヒタチガシの道再ハタチ。古タマ  
復タマ。今タマ遠タマ。此集ウタハタを覽タマん人タマも。すタマ撰ツケ者タマ。心志  
らタマを知タマ。唐歌カタカニ。大和歌ヒタチガシの同タマ。やタマさぬ差カタカニ。先タマを知  
らタマ。大御國テラクニ。異邦カラクニの風俗カタカニ。いタマく違タマ事タマを知タマ  
き也。

古語コトアゲ。いタマく。歌ウタ。詠事ヨム。比タマ難タマ。非タマ。よタマ詠事ヨムの難タマ  
也タマ。がタマ。按タマ。おタマ。よタマ詠事ヨムの難タマ。非タマ。知タマ事タマ

難タマ也。是タマ知タマ時タマ。よタマ詠事ヨム。難タマ。我タマ大和歌ヒタチガシ。心  
とタマ知タマ。とタマ。其原モト。大和魂ヒタチガシ。尊タマ事タマ。知タマ。よ  
也タマ。いタマの。凡人情ヒトシヨウ。察タマ。事變ヒトツ。識タマ。う。如タマ。是タマ末タマ也タマ。そ  
れ大和魂ヒタチガシ。尊タマ事タマ。知タマ。とタマ。す。内タマ大御國テラクニ。尊タマ  
とタマ知タマ。事論ヒトツ。後世タマ。大御國テラクニ。萬國カタカニ。優タマ。事タマ。事タマ。  
言舉コトアゲ。す。人多タマ。とタマ。也タマ。とタマ。其本原モト。あ。や。又  
尊タマ實理ヒトツ。知タマ。荒唐カタカニ。悠邈カタカニ。旨タマ。れ。主張タマ。か。内  
異見カタカニ。臆断カタカニ。出タマ。少タマ。からね。信タマ。ゆ。者タマ。竊タマ。疑タマ  
ひ。信タマ。さ。者タマ。嘲タマ。至タマ。い。も。ん。や。廣く。他方カタカニ。示タマ

す魚せんや。そもそも我大御國大八嶋の本号。豊葦原の  
水穂乃國也。とて称魚川。又。八百萬比國。と優きて。其水  
穂強く堅く清く甘きれど也。其清よや玉似く。其堅き  
事砾の如し。とてより水穂も稻穀の總名。小して。餘の穀  
類を陸穂といふ。對魚川也。稱也。水々一き穂也。と思  
る。謬き。其強く堅よ事ハ。其土も強く堅よる故  
也。其清く甘よ事ハ。其水清く甘きも也。其土堅くして  
壤らく事なれど。其水清く濁る時なく。相交もまく相  
汚まく。其水土の中も孕ませて。生と一出生出る物。また

何物の萬川乃國も優きさん。獨人命の本より水穂を  
一と抽出く。群品含む。扶桑の喬木。金桃乃童子も。何う  
異一まん。貴賤長く定まる。男女和らき乱きさる事も。夙  
くあくよ萌せぬ。さゆも開闢乃始。す。四海の高  
ま最上より。天機も一發て到る。心ころ神化生し。其  
神達鎮領を。給也。豈。豊榮。岩根。萬川國も先立。毎朝照徹  
の御國也。定ま。底津。岩根。萬川國も先立。毎朝照徹  
らせ。大御光。下。生。固。ま。小。豊葦原。中津。國內。そ  
の水土。い。剛潔。獨神仙の靈域也。と。萬邦

仰よま川ろ龜ろは。う龜を尊よ旨あろ哉。其神武不殺乃  
化ゆき。千萬神乃神鎮アシガヒ。先よ鎮め給龜アシガヒ。汝  
葦牙アシガヒ。下根オヒ。いや固く結ほく。浦安乃浪ハヤシ。清く立も  
なきて。生オヒそてろ青人草アシガヒ。あやよ尊アシガヒ。所行も  
姑くかく言舉コトアケ。せぬ言靈コトメニ。の神アシガヒ。幸サキもふ中小事レワサ。と咏  
まん嗟歎カタマリ。乃聲アシガヒ。いづく萬川クニ乃國ヒイ。よ秀サキてぞりん。萬川トツ乃外  
國クニ。其聲アシガヒ。音の溷濁アシガヒ。不清アシガヒ。ナロアシガヒ。セズアシガヒ。其性情アシガヒ。乃溷濁アシガヒ。不正アシガヒ。ナロアシガヒ。セズアシガヒ。其水土  
ぬよアシガヒ。出アシガヒ。も也。其性情アシガヒ。乃溷濁アシガヒ。不正アシガヒ。ナロアシガヒ。セズアシガヒ。其水土  
乃溷濁アシガヒ。不潔アシガヒ。ナロアシガヒ。ヨモアシガヒ。其生アシガヒ。也。聲アシガヒ。性情アシガヒ。乃符アシガヒ。性情アシガヒ

水土乃靈ならん事。さうに論と待あうす。あつも濁生  
ち中よあやそえ善<sup>ヨシ</sup>能見<sup>ヨク</sup>西土乃<sup>モロコレ</sup>芳野の花乃<sup>ウルハニヤ</sup>美善<sup>ヨシ</sup>  
盡せぬよ似ぞろ也。百千鳥侏離<sup>カラサヘツリ</sup>おもたおを免うきさせ  
きも。彼<sup>ハ</sup>まゆろ樂ひく淫<sup>ヨシ</sup>す哀<sup>カミ</sup>ひく傷<sup>キナ</sup>らざらん。性情  
力正を得ん事ハ。ほとく希<sup>ヒ</sup>なり也。况や黃<sup>キ</sup>なろ泉<sup>ス</sup>は染  
紙<sup>ハ</sup>。いそく喧擾<sup>サヤケ</sup>響<sup>オトナ</sup>ひをや。猶餘<sup>ハ</sup>ん乃<sup>クニハラ</sup>萬川國原<sup>クニハラ</sup>其音す  
あく草直清朗なろ事あこも。さゆれ。我天津日靈乃<sup>ヒトハ</sup>大御<sup>ヒトハ</sup>  
照<sup>ハ</sup>ますらん。大御<sup>オホ</sup>光<sup>ハ</sup>遍<sup>ハ</sup>際<sup>ハ</sup>小疎<sup>ハ</sup>きとも。水土自然  
は剛潔<sup>ハタツ</sup>ならずして。彼雜<sup>ハ</sup>も濁<sup>ハ</sup>も系土弱水<sup>ハ</sup>中よ。濁生

育<sup>タル</sup>う故也と知<sup>ル</sup>。さきも其謡<sup>アラシ</sup>曲<sup>アラシ</sup>も、譜節<sup>アラシ</sup>にて是を文  
と<sup>ル</sup>。鐘鼓<sup>アラシ</sup>を<sup>ル</sup>おきを<sup>ル</sup>あすくとい<sup>ル</sup>曲<sup>アラシ</sup>とも。なむ其音清爽  
な<sup>ム</sup>す。其調<sup>アラシ</sup>朦朧<sup>アラシ</sup>なるを<sup>ル</sup>いう、もせん。獨我安積<sup>アサカ</sup>香<sup>アラシ</sup>乃山  
乃井淺<sup>アラシ</sup>か<sup>シ</sup>す。清濁<sup>アラシ</sup>影<sup>アラシ</sup>一見<sup>ル</sup>えねむ。難波津<sup>アラシ</sup>乃何<sup>アラシ</sup>を  
きく<sup>ル</sup>善<sup>アラシ</sup>や惡<sup>アラシ</sup>やを<sup>ル</sup>もん。齋肉<sup>アラシ</sup>乃空<sup>アラシ</sup>く内<sup>アラシ</sup>木綿<sup>アラシ</sup>の洞<sup>アラシ</sup>らう  
ふして天霧<sup>アマキリ</sup>さとろ限<sup>アラシ</sup>ーなを<sup>ル</sup>きとも。金石<sup>アラシ</sup>を假<sup>アラシ</sup>らすとい<sup>ル</sup>曲  
と<sup>ル</sup>。咏<sup>アラシ</sup>ふまうち小天地<sup>アラシ</sup>を感動<sup>アラシ</sup>。神人和樂<sup>アワラ</sup>く。何<sup>アラシ</sup>う百獸  
乃舞<sup>アラシ</sup>をうやまん。驚<sup>アラシ</sup>うまの聲<sup>アラシ</sup>も。わや<sup>アラシ</sup>聞<sup>アラシ</sup>魚<sup>アラシ</sup>よぬ<sup>ル</sup>  
く<sup>ル</sup>。川<sup>アラシ</sup>きう歌<sup>アラシ</sup>よあらざらんと。天然<sup>アラシ</sup>の實理<sup>アラシ</sup>を推<sup>アラシ</sup>く。歌

乃歌<sup>アラシ</sup>を<sup>ル</sup>本<sup>アラシ</sup>比<sup>アラシ</sup>心<sup>アラシ</sup>。序中<sup>アラシ</sup>ひう<sup>ル</sup>小諭<sup>アラシ</sup>給<sup>アラシ</sup>。魚<sup>アラシ</sup>を思<sup>アラシ</sup>ふ<sup>ル</sup>  
し。擇<sup>アラシ</sup>ひ<sup>ル</sup>後<sup>アラシ</sup>邪<sup>アラシ</sup>なき類<sup>アラシ</sup>ひな<sup>ム</sup>んや

古昔<sup>アラシ</sup>考<sup>アラシ</sup>ふるか。凡<sup>アラシ</sup>唐歌<sup>アラシ</sup>其志<sup>アラシ</sup>を言<sup>アラシ</sup>ひ。乃<sup>アラシ</sup>也。さく<sup>ル</sup>も専<sup>ル</sup>  
思<sup>アラシ</sup>意<sup>アラシ</sup>よ<sup>ル</sup>出て。其義理<sup>アラシ</sup>が乃<sup>アラシ</sup>ほうう正<sup>アラシ</sup>一<sup>アラシ</sup>お<sup>ル</sup>の有<sup>アラシ</sup>ん<sup>ル</sup>小<sup>アラシ</sup>。  
是<sup>アラシ</sup>を政治<sup>アラシ</sup>に施<sup>アラシ</sup>して其益<sup>アラシ</sup>少<sup>アラシ</sup>う<sup>ル</sup>す。其用<sup>アラシ</sup>廣<sup>アラシ</sup>お<sup>ル</sup>也。乃<sup>アラシ</sup>も  
其律<sup>アラシ</sup>ニ協<sup>アラシ</sup>へば<sup>ル</sup>ひ<sup>ル</sup>其調<sup>アラシ</sup>成<sup>アラシ</sup>く。乃<sup>アラシ</sup>ち樂<sup>アラシ</sup>を倡<sup>アラシ</sup>へ頌<sup>アラシ</sup>ト<sup>ル</sup>かち  
て。朝廷<sup>アラシ</sup>ニ奏<sup>アラシ</sup>一<sup>アラシ</sup>郊廟<sup>アラシ</sup>ニ薦<sup>アラシ</sup>む。あく<sup>ル</sup>至<sup>アラシ</sup>く始<sup>アラシ</sup>く我大  
和<sup>アラシ</sup>歌<sup>アラシ</sup>。咏<sup>アラシ</sup>ふすなまうち神人<sup>アラシ</sup>を感<sup>アラシ</sup>せ。一<sup>アラシ</sup>むろ妙<sup>アラシ</sup>用<sup>アラシ</sup>。粗<sup>ホ</sup>並<sup>アラシ</sup>ふ

魚よ事あるよ似ても。大和歌をとよも性情を述ゆる  
外なく。思慮よ涉る魚よ之乃から祐也。其言もつれく其  
心をさなくて。云魚も義もなく。聞魚よの理ある事な  
せん。然も義理なよきも。實よ義理なまにも何うす。性  
情乃自然よ出る。其義精く。其理深くして。人智乃測で識  
魚よ限やならぬも。我よりも姑く義理なよきふれえ。義  
理を棄て天地何物う有ん。義理と離れて天地何よか感  
せん。譬へて道行人乃ゆくく遙峯を回視むよ。見ゆるん  
限やも峯有りふ魚く。やうやくに隔く目路乃及もぬ

よ至りても。峯なよといもん乃外なしやい魚とも。なほ  
其峯ハ高く聳えて。雲井乃奥よきて。ゆう如一と知魚也。  
古語よ。僅よ理小それて天地乃感と塞くよい。義を  
ゆく求むきも性と離れて遠一とい魚也。義何を性よ遠  
からん。理また感と塞く魚よ之乃からんや。是まと人智  
の量れり。義理も。真義なよす至理なよきもん。反そ  
神人乃性よ拂也。實ハ天地感する小足さ歎也。情を  
離て道と求むる後乃。識得魚よ限やならんや。當時の人  
此理よ達せん。政教よ補ひなく。日用小疎よ見く。大和

歌も唯一時心をやろ覗ひよたせーえ。漫モ小好色ノ  
媒ト比ニ思ひなせちも陋一からすや。されど我單直清  
朗ノ聲を訛きよとく。反覆くかろ渾濁不正ノ音を尊  
ひあこゑる餘モに。其方比博士をさゑよ置きこら。さき  
もたまく詠吟すを。彼よりて做ひく屈一たる理モセ  
れもへば。更も歌ト一をあうさせろを。反くたゞよ事  
も思あらんもあちきナ。此時よ何よヤテ我紀乃朝臣。  
獨此陋弊を歎ば悲ひ給應ち事久一まに。時なり哉。あり  
卑めて世よ數ま一給もぬ大和歌を。むろくの事を

弃給之ぬ餘モ小撰もせ置應オホミコト大御言乃モ下ヤ。また  
人モニ越あき我紀乃朝臣。其勅モ一奉業モ給應モ一  
モ。實モ千載乃一遇小しく。ハ雲乃道更モ開き。敷鳴乃浪  
再ハ復御應モ。瑞運ナモ考レ一

或書モ。皇國モ萬邦モ優き者アヒイ也トモ。往古ヨモ聖  
者出す。たゞ故モ漢國乃如お禮樂乃制作なく。太典  
ノ缺をろと惜むトハ無也。予をりく是を觀キモ更モ然  
ラス。我大御國モ天津神代乃始矣ヨモ。天地陰陽乃自然  
ノ則トヤ。尊卑別モ長く定マ。男女和きて竟モ乱キ

す。大允神<sup>ツカヘニツ</sup>又奉事<sup>ヤ</sup>。人<sup>ヌ</sup>交<sup>ラ</sup>ふ舉動<sup>ハ</sup>。清<sup>マ</sup>ヤ慎<sup>先</sup>歛<sup>ル</sup>  
いふも更也。或<sup>テ</sup>其八十系<sup>ヤソツキ</sup>亂<sup>ク</sup>事<sup>ハ</sup>絶<sup>リ</sup>時<sup>ナ</sup>く。正  
一<sup>イ</sup>傳<sup>ハシ</sup>萬古<sup>ミツク</sup>一日<sup>ヒ</sup>乃如<sup>レ</sup>。禮<sup>ハ</sup>大<sup>ナ</sup>歎<sup>ヤ</sup>。更<sup>ム</sup>加<sup>フ</sup>魚  
本物<sup>アリ</sup>事<sup>ナク</sup>ん。又大和歌<sup>モ</sup>。彼水土<sup>モ</sup>隨<sup>フ</sup>秀靈<sup>ノ</sup>性<sup>ハ</sup>。  
情<sup>ヨ</sup>ヤ出<sup>ル</sup>自然<sup>ノ</sup>音調<sup>ハシ</sup>。さぬ<sup>モ</sup>開闢<sup>ハ</sup>始<sup>ル</sup>ト。遂<sup>ム</sup>我  
千早振神<sup>セヨンヒ</sup>。遠<sup>ク</sup>人<sup>ハ</sup>世<sup>モ</sup>廣<sup>ヒ</sup>。遂<sup>ム</sup>我  
磯城鳴<sup>ハシ</sup>道<sup>ト</sup>。魚<sup>ト</sup>魚<sup>ト</sup>。上下<sup>ト</sup>。諷<sup>ヒ</sup>。神人<sup>モ</sup>大<sup>ナ</sup>歎<sup>ヤ</sup>。  
魚<sup>モ</sup>樂<sup>ハ</sup>比<sup>シ</sup>聲耳<sup>モ</sup>滿<sup>セ</sup>。樂<sup>ハ</sup>盛<sup>ニ</sup>なぬ<sup>ヤ</sup>。是<sup>モ</sup>上<sup>タ</sup>。歎<sup>ヤ</sup>  
也<sup>モ</sup>非<sup>一</sup>か。何<sup>ヲ</sup>鐘鼓<sup>ト</sup>。也<sup>モ</sup>樂<sup>ト</sup>。大<sup>ナ</sup>歎<sup>ヤ</sup>。玉帛<sup>ト</sup>。也<sup>モ</sup>

禮<sup>ト</sup>。いもん。鐘鼓玉帛<sup>ト</sup>。俟<sup>ク</sup>。始<sup>シ</sup>。禮樂<sup>ノ</sup>典備<sup>モ</sup>。而<sup>ト</sup>  
を<sup>ス</sup>。却<sup>テ</sup>其實耗<sup>一</sup>きう故<sup>モ</sup>。是<sup>モ</sup>虛器<sup>モ</sup>假<sup>ラ</sup>者<sup>也</sup>。され  
も彼國<sup>モ</sup>觀<sup>ラ</sup>。小<sup>シ</sup>原<sup>ハシ</sup>。理<sup>モ</sup>記<sup>レ</sup>。備<sup>ハシ</sup>。大<sup>ナ</sup>古<sup>モ</sup>  
也<sup>モ</sup>。す。其謂<sup>ハシ</sup>禮樂<sup>ノ</sup>實<sup>モ</sup>。而<sup>ト</sup>。全<sup>く</sup>行<sup>キ</sup>。歎<sup>セ</sup>  
は<sup>シ</sup>。と<sup>シ</sup>。見及<sup>ヒ</sup>。侍<sup>ラ</sup>ぬ<sup>チ</sup>や。さぬ<sup>モ</sup>かな<sup>ク</sup>。教<sup>ハシ</sup>。之<sup>モ</sup>  
尊<sup>ヒ</sup>羨<sup>ヒ</sup>。言<sup>ハシ</sup>。セぬ。我浦安<sup>モ</sup>。大御國俗<sup>モ</sup>。あ<sup>リ</sup>。足<sup>ス</sup>。  
ぬ<sup>モ</sup>。さ<sup>ハ</sup>思<sup>ハシ</sup>。惑<sup>ハシ</sup>。比<sup>シ</sup>甚<sup>一</sup>き者<sup>也</sup>。  
或<sup>テ</sup>人<sup>ハ</sup>問<sup>ハシ</sup>。詩<sup>モ</sup>其<sup>モ</sup>志<sup>モ</sup>言<sup>ハシ</sup>。力<sup>モ</sup>。之<sup>モ</sup>魚<sup>ト</sup>也<sup>。</sup>又性情<sup>モ</sup>  
出<sup>ヒ</sup>。も<sup>シ</sup>。其<sup>モ</sup>性情<sup>モ</sup>出<sup>ラ</sup>ん<sup>モ</sup>。乃<sup>ハ</sup>謔<sup>フ</sup>

さうち小神人を感動すへきあり。又何う大和歌は異なる。  
らん。歌を慮るゝ事も有る。さうは忽ち感を失ふ  
よ至る。其理と同機ならずやといふ。已まいく。其  
理然故に似く然らす。咏ひ舉るす凡も小神人を感を  
しむる事ハ獨り大和歌乃自然の妙用小一く。外國人  
乃溷濁不正比音調はあゆへきなうす。其溷濁なるを乃  
も撰ひく後は是を咏歌。是を節奏して始めて神人感  
する所至極也。山溪比水嶺と其ま采く神よ  
萬む魚く。澤畔乃根行も淨洗て後は祭極也。もと一く

自然は生<sup>オフ</sup>ろといふ。其清濁淨穢乃水土は隨ひく。鬼  
神あり。小享ろと享きぬ方をちえ。分りか如よと推く  
知魚。或人諸蕃乃不正朦朧乃聲を論を一中に。月は名  
乃る蜀魂。花は木傳ふ黄鳥也。清亮和諧乃聲也。人み外聞  
事を希ひ深林は叫ふ梟。市肆は騒ぐ鴉也。不祥噭々  
の聲小也。誰うけ耳をやむをさんぞ。此譬へ甚  
くい風と。和漢清濁乃音調分也。神人一も感へ  
も感せざぬ。差先を志る小も足きでといふ。一  
又問。然らも大和人乃作きる詩も反く其調清爽ならん

よは。か。力大和歌。よも。と。く。神人。忽ち感す。魚。き。を。あら。  
己。き。い。も。く。猶然。らす。そ。と。よ。も。唐歌。も。唐歌。ふ。と。く。か。  
た。の。音韵。比。上。よ。お。ゆ。其。聽。座。よ。り。調。も。あん。先。き。い。も。ゆ  
ろ。訓。讀。小。と。く。詩。の。詩。そ。る。す。か。走。ら。ん。や。あ。され。と。我  
大。和。言。乃。訓。よ。移。一。て。後。其。義。明。ら。う。な。う。ん。よ。は。其。訓。よ  
移。さ。く。故。事。あ。こ。と。く。す。我。大。和。歌。乃。調。を。假。く。後。僅。小  
其。感。通。す。魚。よ。け。其。調。を。假。す。も。あ。故。魚。が。く。す。是。止。事  
を得。さ。ろ。に。似。こ。と。そ。ー。其。す。く。音。讀。よ。せ。も。其。義。理。の。分  
き。き。魚。其。風。調。乃。聽。魚。よ。な。き。何。そ。梵。經。を。讀。誦。する。小。異

な。う。ん。さ。き。も。大。和。人。乃。作。き。る。唐。歌。も。殊。更。よ。調。を。離。き  
て。其。理。で。乃。上。を。見。ろ。ふ。あ。故。比。え。さ。ろ。も。其。調。々。々。な。う  
さ。ぬ。う。故。也。凡。物。一。た。ひ。感。一。く。再。い。忘。る。事。あ。こ。と  
さ。ぬ。是。人。情。也。感。一。く。忘。ぬ。者。も。そ。と。よ。で。真。よ。感。す。る  
そ。れ。よ。あ。く。も。彼。理。で。よ。入。を。り。も。其。感。甚。じ。淺。く。ー。く。  
調。よ。で。入。を。り。其。感。深。よ。よ。見。ろ。時。も。い。そ。の。故。感。と  
す。ろ。に。足。さ。ぬ。を。り。也。ぞ。も。く。唐。歌。も。往。昔。大。友。大。津。乃。二  
皇。子。倡。へ。初。先。給。ひ。ー。よ。此。道。大。よ。興。き。と。是。と。真。名。序  
よ。移。彼。漢。家。之。字。化。我。日。域。之。俗。民。業。一。改。和。歌。漸。衰。ど。い

龜<sup>カニ</sup>は實に然也。今乃都<sup>ハシ</sup>遷<sup>アリ</sup>て也。歷朝盛ん<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>也。  
當時寛平延喜の大御世<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>。ますく是<sup>ヲ</sup>観<sup>ム</sup>也。  
良辰佳節<sup>ニ</sup>群臣宴<sup>セ</sup>。錫<sup>フ</sup>文人學士<sup>ヲ</sup>召<sup>ム</sup>。  
詩<sup>ヲ</sup>諷<sup>メ</sup>文<sup>ヲ</sup>作<sup>ラ</sup>。上<sup>かく</sup>好<sup>メ</sup>。下<sup>を</sup>給<sup>フ</sup>也。  
下<sup>ニ</sup>是<sup>ヲ</sup>甚<sup>一</sup>く。天<sup>下</sup>押<sup>ナ</sup>也。諷<sup>詠</sup>吟<sup>弄</sup>せざる<sup>ニ</sup>乃  
なき<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>。此後比御世<sup>々々</sup>小<sup>ニ</sup>。此道乃博士<sup>ト</sup>ち。名家  
こもく競<sup>フ</sup>起<sup>ス</sup>。其才名世<sup>ニ</sup>高<sup>ク</sup>。さか<sup>ニ</sup>非<sup>ス</sup>。然<sup>る</sup>  
ニ其金玉<sup>ノ</sup>聲隨<sup>テ</sup>や。遺響留<sup>マ</sup>セ<sup>ラ</sup>希<sup>シ</sup>。か<sup>リ</sup>  
人口<sup>ニ</sup>膾炙<sup>ス</sup>。乃彌尠<sup>一</sup>。遠くも岑守の凌雲集。仲雄

王乃文華秀<sup>ハ</sup>麗集。貞主乃經國集。若干卷。是皆英主  
賢王比勅撰<sup>セ</sup>也。名<sup>ト</sup>也。名<sup>ト</sup>也。名<sup>ト</sup>也。知<sup>ラ</sup>ぬ人多<sup>シ</sup>。老<sup>シ</sup>乃  
外百家比詩集<sup>ト</sup>。ふそ<sup>ト</sup>。よく世<sup>ニ</sup>遺<sup>キ</sup>也。大<sup>ニ</sup>やう  
殘缺<sup>ハ</sup>。よく地<sup>ヲ</sup>掃<sup>フ</sup>。よ<sup>リ</sup>近<sup>イ</sup>。奇<sup>一</sup>手<sup>ヲ</sup>非<sup>モ</sup>也。物  
よ終<sup>モ</sup>事<sup>ニ</sup>限<sup>ル</sup>也。事<sup>ニ</sup>限<sup>ル</sup>也。其始先あま<sup>ト</sup>也。我大  
和歌乃如<sup>ホ</sup>也。始めもなく終<sup>モ</sup>也。當時弃<sup>テ</sup>也。さ<sup>ク</sup>と  
さ<sup>ク</sup>事<sup>ト</sup>。土<sup>ノ</sup>如<sup>ホ</sup>也。龜<sup>ト</sup>も。下<sup>ニ</sup>流<sup>キ</sup>く行水<sup>乃</sup>。猶<sup>アリ</sup>  
くて絶<sup>ロ</sup>事<sup>ト</sup>。遠<sup>ニ</sup>神代<sup>ノ</sup>詠<sup>シ</sup>也。世<sup>々</sup>比撰集古今乃  
家集<sup>ト</sup>。うそ<sup>ハ</sup>今様催馬樂<sup>ノ</sup>類<sup>ヒ</sup>。本童謡<sup>ノ</sup>イ<sup>ヤ</sup>。さ<sup>ま</sup>

て。落り隈なく傳ちやく。日々に倡へ戸々小謡ふこと。昔今うはる事な。かく傳ちぬとあら傳ちうきゆも。所謂感する所乃淺きと深き小よきと。詩も其感理より入て。調よなきの故よ。やむ事速やきく。歌も其感調より在く。理也によし。さ故よ。達もろや遠い。理也も限也有て。調も究也なれど也。或云。何ぞ殊更よ理也と調乃差ひといもん。大和歌も大和言ふにて。常に親一きとも忘ぬ。事な。唐歌も唐言ふ。耳馴さぬう故よ。忘きやすき也。其耳馴さぬう故よ。唐歌も調よも入難く。常に

親一きう故小。大和歌も理也を待さぬ也。かうんよも。畢竟其論同一事に落先也。さきも詩歌也。其性情よも發する也。力も至るくも。二行なき小似それとも。其感する所も於く異なり。所以ある事を志版へよ也。真名序。俗人争事。榮利不用詠和歌。悲哉雖貴。弟相將富餘金錢。而骨赤腐。土中名先滅。世上適為後世被知者。唯和歌之人而已。何者語近人耳義慣神明也。といふ也。をまく此序の微意乃所在を識く。紀氏乃宿憤を述る小似也。又問。然らば詩も畢竟無用比物といもん。是何方言す。

清濁も天地のなる所。晝夜もとかゆゝ所也。地を離まく天はほき。夜を棄て晝小のみよゆるせんや。物も用ふゆ所あり。用ひきる所あり。かたごに詩あるも。大御國も歌なくも有ゆう。歌う如し。大御國も其詩を假用ひならせら事。既も千載の久一ば小及ゆ。其用なれどいもんや。物其所を得るゆきも。無用の物ある事なし。其所を失ふときた。歌も無用の長物そらぬ。されども當時の弊風。おゝ發きる事を察して。紀氏の微意ある所を知すもある極う。詩も天下比義を盡せらるべ也。歌も

天地の感を達するべし也。何う漫で優劣を論せん。只神人幽顯の混淆するゆう。太用を辯するべし。志を理を極へく。情を調ふゆま。又自然のすゝみ。詩も文也。志を言く。情其中小。志を。歌を情を述く。志ふも及ふべし也。志より。志を。ふや。情を。ふゆ。共。嘆。嘆。外。出。情志相通ひ。其流を混同。もろふ似。モトイ。通。其出。源。か。ん。ふ。其切験を見。及ん。卒に涇渭の違ひ。是を喻。歌も神祇官の幣物也。詩も太政官も。收む。魚。具也。云。魚。

又或人難へるゝもく。詩や志といひ。歌や言を永くすり  
い語也。古よや此歌乃字とうゑとよますべく。大和歌又あ  
てそろゑ。とく皇國ミクニいうゑも。謡ひく言を永くするゑな  
れもなり。先哲乃説大やう然アラシ大和うゑ  
は。歌乃字比意よくかなへらん。今詩と對舉して論  
をろも。全く當らき故非アラシ然らす。うゑ  
といふも。と嗟歎乃聲をさせろ。称ふく然うまへ出く  
謡ふ事といふも非也。さて其嗟嘆の聲也。自然ももとモ  
永おきりなま。そもそも歌乃字比。永言乃意を假用ひ

そろゑ。大よせ大和言。かへこり文字を當く。うまく  
叶ゑろせ乃も非す。知ゑし。然らあうゑも。譜節にて謡  
ふ。そぞは非也。街談俚諺乃類ひす。猶歌ふ先  
也。况やうゑなうんをうこやさうんや。いもゆる神樂催  
馬樂今様のあらき。うゑもあくすく何う。只うゑも出  
ろまよく調へなくて。譜節を待て。謡えますして謡ふな  
れ。自然乃妙用ある。そろゑ。是うゑと称ふ故乃名  
義也。譬へや美人り粧粉を假毛アラシ。た乃はう艶なる  
う如。ほく粧粉をほく。あさんアカル麗もへゆきうふも一

かうん物う。又天然の風姿神彩。中々に汚らうん。其嫌  
ひなき小も非さ先る。委一き論あやとい魚とも。今盡一  
難し。さはさく譜節を待すして。其調をなすを力也。其姿  
嗟咏歎の聲。清朗舒緩ふりく。僅々一音一言の上小も。自  
然の雅韵も心う故也。おきを山鳥の一聲。さく人鼓舞を  
る小喻ふ。さきい趣一をひ此誠と失ふトよも。其雅韵共  
ニ乱き。彼言靈も何より幸も。さきも只此調  
譜ひく乱きさらん。また。歌とあいふ先也。何そ理  
アとま内乃暇あうん。况や即奏と於くセヤ。ア多乃名義

も粗集中と解き。猶委一くも新學異見と辯せ。是らと  
見こと。後詩と對角く。大抵う差と。風旨と知角き  
也。さうは又大和う多も。かなこれ歌も。其言永やうに謡  
さんふ也。彼理アと離き。専ら調とあうんと同一から  
んとは。其感應の效驗も。同一かふをう思ふんも。猶然  
らす。既ふをい。極めり如く。他邦も其人民柔土弱水乃中  
小生出く。其性情よと出らん聲音と。極とも。清潔な私  
事あこまく。さぬも人カミならば禽獸の聲まで。更  
皇國乃禽獸比如き。は非也。たゞ金石糸竹の無情の音

至もく。其濁韵をまぬうききゆも。水土自然に理  
一。か乃理なきに似て。故乃深理なるをや。聴人ふきと  
きく知る。虚器の死聲す。猶かく比如。况や風聲水  
音比類。何ぞ皇國ト同一。ゆゑん。其水土不潔なほ。より。  
天氣常々朦朧とて。我日乃本川大御空オホミツラ。清く朗らう  
なゆう如き事あくもさゆえ。また論なし。さく然何乃上  
也溷濁不正ならん。其大なゆえもいふも更也。小  
なゆれといゆとも。大やう擇ひく清濁を分き。此事  
能たら。善惡邪正もすなまち人物乃清濁より。よく

擇もき。此事を得ゆきんや。是も。教法ナシ。乃出くゆ所以也。  
さゆを彼國也。聖賢の教。おちたきう故。小中々に亂き。  
世々治ましに。思ゆるも。未と見く木を知さゆ乃謬也。  
て。是やかく風土自然乃道なる事を辯せざれど。さく志  
かく清濁を擇ふ。きや。又理。乃に涉らざる事を得ゆら  
り。此謬ふや。僅。又理。又小涉れ。忽ち天地乃感。と塞く  
也。かな。これ歌也。其。又。彼理。又よ。出く。理。又な。さく  
調へ。なを。ゆ。か。乃。な。ほ。其。調。乃。上。よ。自然。又。本。乃。理  
也。を含み。離をさゆ。か。乃。あ。ん。さ。ゆ。も。大。御。国。の。也。

よ。而清濁なく。一擇ひなき也。わ。同日。比論。又非す。抑此水土自然の神理也。と。より。萬品小。こと。や。も。遺す。也。お。な。し。お。き。て。比事。皆深。き。考。あ。や。く。委。一。く。も。別。よ。論。セ。ア。今。て。唯。聲。音。の一。端。小。か。け。く。説。か。せ。也。其。差。ひ。毫。釐。又似。そ。故。を。そ。く。忽。き。見。る。事。か。う。實。又。本朝。異。邦。乃。流風。萬。古。千。里。又。判。海。所。の。基。本。也。され。も。畏。お。く。と。我。神國。乃。美。也。清。乃。一。字。を。そ。く。蔽。ふ。魚。一。橘。良。基。う。庭。訓。又。云く。雖。有。百。術。不。如。一。清。ト。此。語。神。明。又。通。す。魚。一。何。妨。治。政。又。止。ま。う。ん。さ。き。も。往。昔。野。山。大。師。在。唐。乃。日。越。州。の。節。度。

使。又。與。魚。給。一。函。書。又。伏。顧。我。日本。國。也。曠。和。初。御。<sup>テ</sup>天。夸父。不。步。之。地。也。途。往。乎。仲。尼。將。浮。所。不。能。之。海。也。山。谷。則。秦王。欲。往。所。不。至。之。嶽。也。ト。書。を。そ。や。既。よ。か。ー。こ。の。載。藉。又傳。ふ。足。所。を。東。方。有。國。其。人。懇。直。禮。義。之。鄉。君。子。之。國。ト。崇ま。ふ。先。也。尊。ノ。ト。愉快。な。う。す。や。ト。近。く。ち。入。道。時。名。朝臣。宣。も。く。我。神。國。乃。八。荒。又。優。き。こ。ろ。を。人。乃。首。面。又。譬。ふ鱼。ー。一身。乃。寂。上。又。位。ー。眼。耳。鼻。舌。心。比。衆。靈。こ。く。聚。る。さ。き。も。そ。ひ。ト。而。剛。潔。又。一。て。そ。ろ。く。の。不。淨。を。受。キ。萬邦。も。是。又。從。ふ。四。肢。百。骸。乃。如。ー。ト。此。說。ま。と。深。く。信。す。る。

足き。仰う。さぬ。色。きん。や

此大和歌と唐歌。似く同一。から。さぬ事。序中に大畠辯。いらき。そと。い。魚。と。彼詩。乃。玩。も。きん。世。え。た。蟬。卫。の。關。堅。く。ー。そ。通。ら。ん。事。や。す。から。さぬ。を。量。ど。給。ひ。唐。囀。の。虚。音。を。假。く。姑。く。か。な。こ。さ。ま。小。媚。謡。ひ。て。物。ー。給。ひ。ぬ。き。も。全文。其。微。意。の。所。在。を。見。あ。る。人。な。く。只。文。章。の。麗。も。ー。き。れ。い。愛。翫。も。き。く。詩。乃。盛。ん。な。ふ。ふ。さ。ー。加。魚。く。世。よ。行。き。こ。ろ。を。其。慮。で。の。遠。き。よ。出。り。とい。魚。と。も。實。も。天。津。御。神。乃。あ。や。よ。奇。ー。き。大。御。所。為。

ふ。ー。く。千。載。乃。恩。賜。也。き。う。ー。此。歌。と。ー。絶。も。散。失。す。ー。永。く。傳。と。モ。鳥。の。あ。と。久。ー。く。よ。ま。き。て。は。と。願。ひ。給。ひ。ー。と。世。よ。志。願。く。千。載。乃。今。よ。至。る。く。太。虛。乃。月。を。望。む。う。如。ー。歌。乃。さ。ま。す。も。あ。マ。事。比。心。と。得。く。う。ん。入。も。仰。き。ま。つ。う。き。う。ん。や。ち。紀。氏。な。く。れ。と。よ。給。魚。き。ー。歌。乃。道。と。く。ま。れ。る。哉。當。初。よ。モ。疏。述。注。解。數。十。家。よ。及。ひ。さ。あ。も。思。ひ。と。重。ね。精。む。と。究。先。さ。ぬ。よ。非。も。と。ー。酒。と。も。其。旨。と。あ。る。意。と。知。あ。と。な。を。き。も。靴。と。襠。に。る。痒。か。ア。代。と。と。カ。ー。み。を。免。き。さ。り。わ。こ。な。う。ん。裳。と。被。く。

乃謬ヤリせ多うん。己キ少キヨモ此集セ喜ニ。讀  
耽るト年久一く。遂ニ紀氏乃神靈ちもひく。たまく  
其微志ア有ル所。見ニ事アリ。隨ひ。かねをなく。も  
大御國の大御國。萬古乃始先。認免得。大和歌  
乃大和歌。ナラ。千載。比惑ヒ。解。似。モ。ト。ア。レ。ト。  
也。な。か。後賢。乃非議。ア。ン。セ。恐。タ。ビ。シ。希。ク。モ。世。乃  
識者。我過ち。補。シ。深。悔。ナ。ウ。志。先。不。朽。比。幸  
ひ。な。う。ん。ト。云。

天保三年九月十五日 正六位下行長門介平朝臣景樹

